

現代日本のモノ供養

— 新聞報道による鳥瞰と大学生意識調査から —

隈元正樹

問題の所在

1. モノ供養の概要
2. 新聞報道にみられるモノ供養
3. 大学生意識調査

おわりに

註

参考文献

問題の所在

我が国では、人に限らず、動植物や無生物（＝モノ）にまで、生命や意識の存在を認め、それを畏れ、感謝し、あるいは未練・愛着をもって、供養・お祓いをしてきた伝統がある。人形供養、針供養、筆供養などはその代表的なものである。現在でも、それらは廃れるどころか、テレホンカード供養やパソコン供養にいたるまで、次々と新たな対象を加えており、全国の社寺ではモノ供養・感謝祭が盛んに行われている。筆者は、昨今の片付けブームもそのような状況と関連しているのではないかと考えている⁽¹⁾。

モノ供養の隆盛や片付けブームの背景には、大量生産・大量消費社会の進展がある。生活財はどんどん増加しているが、居住スペースは狭小なままである我が国においては、次々にモノを廃棄することが必要となっている（読売・東京 2008/1/10）⁽²⁾。しかし、愛着のあるモノは単なるゴミとしては処分できない⁽³⁾。その際の心理的負担を軽減するいわば「装置」として、モノ供養に言及した研究もある〔寶多2003〕。「断捨離」等の処分式の片付けが何らかの精神性をおびる背景の一端もここにあるだろう。

我が国の宗教伝統においては、神道における「むすび」の思想、新宗教における生命主義的救済観など、生命の生成化育のはたらきがカミ（神仏）と捉えられ、カミと人間はしばしば連続的なもの（分霊＝わけみたま）と考えられてきた〔国学院大学日本文化研究所編1994、対馬路人ほか1979〕。さらに日本仏教における「山川草木悉皆成

仏」(山川草木皆有仏性)は、自然までその連続体の中に含めている。このような考え方は、一種の汎神論あるいはアニミズムであり、モノ供養は文化論的にはこのような伝統の中に位置づけられよう。

また、ポストモダンの現代社会論的意味では、消費社会の進展によって、モノはその使用価値や、交換価値とは別の記号論的意味を持ち始めている。モノは単なる道具ではなくなってきており、我々にとってより意味的に重要なものであるが故に、それを手放すことは、それに相応しい儀式(意味抜き)を要求するのではないか。これがモノ供養の現代的意味として考えられる[ボードリヤール1992, 1995]。

ただし、本小稿においてそのような問題を詳細に論じる余裕はないため、ここでは、新聞報道と質問紙調査の結果から、現代日本のモノ供養の全体的状況を把握し、その若干の傾向を整理することに留めたい。

1. モノ供養の概要

そもそも「モノ」とは何だろうか。日本語では「もの・モノ・物」の表記があるが、民俗学者・佐野賢治は下記のようにそれを整理している。

もともと日本語の「もの」は、有形・可視的な存在と、無形・不可視的な存在の両者に使われ、ともに霊的存在の意味も含み、時には人格化や形象化されて人々に意識されてきた言葉—中略—「もの」の全体像をとらえるためには、有形の“物”、無形の“もの”を併せ見る視点が重要となり、これにより両全の形“モノ”となってその存在の全体像が初めて掴めることになる[佐野2002: 3]

本稿では、上記の整理を踏まえつつ、実際の検討対象としては、人・動物・虫などの生物、自然や土地(場所)以外の物理的形態をともなった「モノ」に限定する。

「供養」は、本来仏教用語であるが、民俗語彙でもあり、複雑な意味や行為を内包する。岡田真美子は、器物・動物供養という場合の「供養」は、サンスクリット語のサトカーラ(satkra)ではないかとして、「(敬意をはらって、)相手にふさわしい対応をなすこと」の意であると述べている[岡田2007: 103]。本稿では、「(特にモノを処分する際に、)モノの霊的次元に働きかけるなどして、感謝の思いを表したり、除災招福を願っておこなう宗教的儀礼」を指すものとする⁽⁴⁾。

また、本稿では、社会事象としてのモノ供養を対象とするため、あまりに個別的、単発的な行為・イベントは除外し、原則的には一定の集合性・継続性をもつものを対象としたい。

さて、松崎憲三は、モノ供養について「いずれも戦後始められたものが多く、近年

誕生したものも少なくない。したがって研究者個人がすべてを把握することは難しく、組織的な調査の必要性を痛感している」[松崎2004：39]と述べている。管見の限り、これまでのところ、モノ供養の全体像を明らかにした研究はないが、参考になる研究はある。

寶多國弘は、名古屋市内の993の寺社に質問紙調査（郵送法）を行い、351の有効回収（35.3%）を得たが、そのうち、定期・不定期にモノ供養を行っている寺社は32（1%弱）であった。さらにそのうち寺社が主催していたのは3件のみであった。

また、モノ供養の開始時期は、最も古いものでも1931年で、1980年代で全体の半分を占めることなどを明らかにした [寶多2002]。

カフラマン・ジャーヒットは、朝日新聞の過去20年間の道具・モノ供養の記事（104種の道具・モノを対象とした822件）を分析し、供養の種類では針供養と人形供養で46%を占め、前者の主催者は、専門学校が最も多いことなどを明らかにした。また、タウンページに記載された北海道と四国の6,438寺社の10%を等間隔抽出法によって選び、電話調査を行い、330の回答を得た。寺社での道具・モノ供養の実施は8%で、宗派別では真言宗にもっとも多様な供養が行われていることなどを明らかにした [ジャーヒット 2009]。

2. 新聞報道にみられるモノ供養

モノ供養はしばしば寺社で行われるが主催は業界団体の場合が多いため、その全体像を明らかにするためには、寺社からアプローチするのは限界もある。本稿では、宗教情報リサーチセンターの宗教記事データベースを用いて、新聞報道におけるモノ供養に関する記事をひろってみる。ジャーヒットも新聞報道（全国紙のデータベース）からのアプローチを試みているが、宗教記事データベースを用いる利点は、①全国紙のみならず、地方紙、専門紙、スポーツ・夕刊紙、雑誌も収録している（特に地域における宗教関係記事は地方紙が充実している）、②分類別検索が可能（ワード検索による漏れがない⁹⁾）などがある。

一方で、報道されたものは、実態をそのまま反映しているわけではない。他の報道すべき事項との相対的關係や、報道社・デスク等の意向に左右されるからである。それにもかかわらず、モノ供養の現代的諸相を把握するという本研究の目的、またパイロット調査的意味での戦略性もある。例えば、一定の社会的認知を得た（あるいはまさにその報道によって得ることになる）事象の抽出、現代的変化やトピックの探索、すなわち、何が・どのような観点で注目されているかを明らかにすることが出来る。

そこで本章では、宗教記事データベースを用い、2011年1年間における分類名「習俗・慰霊」記事17,433件の見出しをチェックし、モノ供養に関係のある記事を抽出し

た。以下、トピックごと（およそ時系列に配置）に、現代日本のモノ供養を具体的に
見ていく。

・農業機械供養（記事件数1件、以下同様）

熊本県山鹿市の若宮神社で1月6日に行われた「ガランザサ祭り」は、家畜の無病
息災を祈る祭りであり、かつては農耕用の牛馬を連れた参拜者が夜明け前から行列を
なしたという。しかし50年程前から、農業の機械化にともない減少。現在ではペット
が中心で、トラクターなど農業用機械の安全祈願もあるという⁽⁶⁾（熊本日日 1/7）。

・だるま供養（3件）

長野県飯田市の元善光寺(天台宗)で1月7日、「七草だるままつり」が行われ、地元
住民などから寄せられただるまや縁起物、お守り、お札などが供養され、燃やされた。
同寺では、七草がゆを提供するのが通例行事だったが、地域でのどんど焼きが減少す
る中、30年程前から、縁起物を供養して燃やす内容へ変更したという（南信州 1/8）。

東京都足立区の西新井大師（真言宗）でも2月3日、だるま供養が行われた。1954
年に始まった恒例行事で、全国最大規模だという。今年は約2万個のだるまが集まっ
た（産経・東京 2/4）。

・どんど焼き（28件）

1月15日の小正月前後を中心に全国各地で行われている「どんど（とんど・どんど）
焼き」（他にも「左義長」「お焚き上げ」等の名称あり）について各紙が報じている。
どんど焼きは、正月飾りや古くなった社寺のお札、縁起物などの供養・お祓いでもあ
るが、近年では行事スペースの確保の難しさや環境への配慮などから、都市部（住宅
地）では減少傾向にある。

一方で、実行委員会を設けて行事の再編を図ったり（東京・東京 1/17ほか）、回収
されたモノの一部だけを代表として象徴的に燃やしたり（読売・高岡 1/17）、販売店
が独自に回収して郊外で行う（山陰中央新報・松江 12/30）など、形をかえつつも維
持していこうという動きが見られる。

注目されるのは、近年、指定外のモノが持ち込まれ、主催の寺社などが困っている
と報じているものが多いことである（読売・長野 1/14、毎日・宮城 1/14、山陽 1/16、
三陸新報 1/21、神社新報 1/24）。これは、ライター、乾電池などの引火物によって
怪我をする、あるいは分別や処理の労働的・経済的負担、人々のモラル意識の低下と
いった一般的・世俗的問題でもあるが、他寺社のお札などのモノが持ち込まれること
への宗教的禁忌意識（教団・宗教者側と一般の人々との意識のズレ）も見られた。ま
た、持ち込まれるモノには一定の傾向性があり、そこから人々がどのようなモノをゴ
ミとして捨てられない（≡供養したい）かを探る手がかりにもなる。具体的には人形・
ぬいぐるみ、入れ歯、宗教書、印鑑、位牌、日記などが報道されている⁽⁷⁾。

・筆（鉛筆）供養（6件）

全国の天神社などで、書道上達や学力向上を願って筆供養がおこなわれた。「筆供養」「筆まつり」などと称しているが、多くは鉛筆も同様に供養している（神奈川・相模原/県央/県西 1/24、東京・東京 1/26、上毛 3/2）。

愛媛県宇和島市の立間小学校では3月8日、鉛筆に感謝の思いを表す「鉛筆感謝祭」が行われ、児童らが1年間で集めた鉛筆を、校庭にある鉛筆型の塔「えんぴつの塔」に収めた。塔は物を大切に作る心を育もうと、同校教諭や保護者らが建立し、1979年から毎年度末、児童らが短くなった鉛筆を収めている（読売・愛媛 3/9）。

・針供養（12件）

2月8日と12月8日を中心に、全国各地で針供養が営まれ、各紙が報じている。供養では、針への感謝とともに、技術の向上、安全などが願われていた。先行研究でも指摘されている通り、供養祭の主体は裁縫教室の教師の組合や、服飾専門学校であった。場所は寺社が多いものの、専門学校に宗教者を招き行われた例（岐阜 2/9、愛媛・松山 12/9）もあり、宗教者の存在が確認できない例（読売・福岡・夕 12/8）もあった。また、学校内に供養塚を建立していた例（北日本・富山 12/9）があった。

・入れ歯供養（2件）

宮崎県延岡市歯科医師会は2月9日、同市の今山大師（真言宗）で、初めての「入れ歯供養祭」を行い、それまでに回収した不要になった入れ歯・差し歯・金冠類などを供養した。供養されたモノはリサイクルされる。入れ歯などは、遺族などで処分に関わる人は多いが、金・銀などを含む貴重なりサイクル資源でもある。同医師会の岩木会長は「ごみとして捨てられるのはいけないという思いもあり、リサイクルするだけでなく、しっかり供養までしたいと考えていた」⁽⁸⁾と理由を説明。野中住職は「入れ歯は単なる代用品ではなく、命を支えるもの」などと話した。今後も年1回続けていく予定だという（夕刊デイリー 2/10）。

入れ歯供養については、岡山県の妙興寺（日蓮宗）の事例も報告されている（寺門興隆 10月号⁽⁹⁾）。

・干支供養（1件）

愛知県瀬戸市の株式会社中外陶園では2月11日11時（土の日・土の時⁽¹⁰⁾）、陶磁器の「寅」の置物に感謝し土に返す「干支供養」が行われた。住職らが木づちで割り、市民400人が読経にあわせて、敷地内の「干支塚」で祈った。砕かれた置物は原料として再利用される。1990年からの恒例行事（東京・東京・夕 2/12）⁽¹¹⁾。

・人形供養（13件）

年間を通じて、全国各地で人形供養が行われている。記事件数も多い。多くのところで、節句人形などの飾り人形と一緒にぬいぐるみの供養も行っている。

3月2日付の『毎日新聞（東京版）』では、ひな人形の適切なしまい方と同時に、処

分方法が紹介されていて興味深い。「マンション暮らしで飾るスペースがなく手放すことにした」という声や、不要になった人形を引き取っている寺の住職の「住宅事情を反映してか、最近はお内裏様とおひな様だけを残し、三人官女など段飾りを送ってくる人が目立つ」という話から、人形供養隆盛の社会的背景の一端を看取できる。同記事で紹介されている処分法は、人形供養を行っている寺社への依頼、「勝浦ビッグひな祭り」への寄贈、日本人形協会（東京都台東区）の供養代行サービスの利用である（毎日・東京 3/2）。

注目されるのは、葬祭場が主催して行う人形供養が散見されたことである（日本海・鳥取 11/7、秋田魁新報・秋田 12/5、南信州・飯田 12/8ほか）。青森県五戸町で八戸農協が開催している「人形供養祭」は、〈葬祭事業のPRなどを目的に〉行っているという（デーリー東北・八戸 10/30）。

またここでも、供養料を支払わない、供養に立ち会わないなど規則を無視して人形を捨てていく人がおり、問題となっている。和歌山県和歌山市の淡島神社ではそのような場合、神社の規則によって供養せずに処分するという（産経・和歌山 3/3）。

・仏像供養（3件）

奈良国立博物館（奈良市）では年4回、東大寺と興福寺の僧らにより、「仏像仏画供養」を行っている。国立博物館で開館時間に法要を行うのは同館だけ。東大寺の森本公誠長老（1934～）は「単なる物か、心のこもった礼拝の対象とみるかの違い。仏像の気持ちになれば、法要もないのは不幸なこと」などと話した（奈良 2/13, 7/23、読売・奈良 7/23）。

・こけし供養（1件）

福島県福島市土湯温泉町のこけし供養祭は5月28日、同町の薬師こけし堂で開催され、土湯伝統こけし工人組合の組合員ら約30人が参列した。全国から奉納されたこけし約500点が供養されたが、2011年は東日本大震災で亡くなった被災者の形見も含まれた。同日はこけし絵付けコンクールの表彰式も行われた（福島民報・福島 5/31）。

・写真供養（3件）

奈良県の写真店経営者らでつくる県写真材料商組合は「写真の日」¹²⁾の6月1日、奈良市の大安寺（真言宗）で、写真やカメラの供養を初めて開催する。同組合では、自分が写っているが気に入らない写真、故人の写真、心霊写真など「捨てるに捨てられない写真をおはらいして焼却します」としている。カメラやビデオは供養後、資源として再利用するという（産経・奈良 5/24）。

帯廣神社（北海道帯広市）でも6月1日、「写真感謝祭」が行われた。十勝写真館協会の主催。大野宮司は、「東日本大震災の被災者ががれきの中から写真を探している姿を見ると、そこに込められた思い出の尊さを感じる」と話した（十勝毎日・帯広 6/1）。

北海道神宮では9月21日、札幌写真館協会の主催で「写真報恩祭」が開かれ、約4

千枚が集まった。故人の写真が多いが、破談になったカップルの写真などもあった(北海道・札幌 9/22)。

・扇供養 (1件)

徳島県徳島市の日本舞踊教室は6月8日、同市の厳島神社で、使い古した扇子を燃やして、芸の上達を祈願する「扇供養」を初めて行った。同神社は芸の神様とされる弁財天を祀っている(徳島・徳島 6/9)⁴³。

・仏具供養 (5件)

滋賀県彦根市の天寧寺(曹洞宗)で6月7日、古くなるなどして役割を終えた仏壇などに〈感謝する〉「仏壇仏具供養会」が営まれた。彦根仏壇事業協同組合が主催。2010年度から始められたもので、仏壇が25点、仏具が150点集まった。組合員の吉田青年部長によると、「マンションが増えるなど住宅事情が変わり、大型仏壇の取り扱いに困る人が増えている」という(京都・滋賀 6/8)。

京都市右京区の清涼寺(浄土宗)では9月25日、京都府仏具協同組合商部青年会の主催で、「仏壇供養会」が営まれた。毎年秋の彼岸に営まれ、今年で34回目。買い替えなどで同組合に引き取られた仏壇、仏像、位牌、念珠などが焚き上げられ、参列者は〈感謝の念を捧げた〉(中外 10/1)。

・茶筌供養 (2件)

秋田県横手市の洞雲寺(曹洞宗)境内で6月23日、茶道で使う茶筌を供養する「茶僊都歌(ちゃせんづか)」の建立式があった(秋田魁新報・秋田 6/26)。

北海道の裏千家淡交会釧路支部は7月12日、同市の本行寺(浄土真宗)境内の〈茶せん供養塚〉前にて、23回目(1989年～)となる茶筌供養を行い、〈今後のさらなる精進を誓い合った〉(釧路・釧路 7/13)。

洞雲寺の事例で興味深いのは、そのきっかけが2007年に行ったある詩人の追悼法要で、献茶したことであったということである。モノ供養(モノそのものへの儀礼)とモノの奉納(神・故人へモノを捧げること)は紙一重だが、それを如実に示している⁴⁴。

・箸供養 (3件)

高知県高知市の高知八幡宮では3月6日、箸供養がおこなわれた。観光関係者らでつくる実行委が主宰して28年前から行われている。県内のホテルや飲食店で、1年間に使われた箸約1万本が供養された(読売・高知 3/6)。

東京都千代田区の日枝神社で「ハシの日」の8月4日、「箸感謝祭」が開かれた。1975年から執り行われており、〈延命長寿、無病息災を祈る祭り〉。製造業者・販売業者・飲食業関係者ら約100人が参列した(東京・東京・夕 8/4、読売・東京 8/5)⁴⁵。

・版下供養 (1件)

京都府内の広告関連会社が加盟する京都広告懇話会が主宰する「第27回原稿感謝の日 版下供養」が8月26日、同市の本能寺(法華宗)で営まれた。技術の進化(デジ

タル化)によって、「版下」という言葉は〈死語になりつつある〉が、元原稿に感謝することを主眼に、毎年執り行われてきた。

本能寺の菅原日桑貫首は「私たちは、この1年間の広告、情報、ITネット活動において製作の基となった版下、絵コンテ、フロッピー、MOなどのメディアデータをはじめ、あらゆる業務の源になる原稿に対してあらためて感謝を申し上げるとともに、安らかに成仏されるよう心より祈願いたします」と請願文を読み上げた(中外 9/3)。

・櫛供養 (1件)

美容師らでつくる「京都美容文化クラブ」は9月26日、京都市の安井金比羅宮で、使い古された櫛に〈感謝〉する「第51回櫛まつり」を開いた。持ち込まれた櫛を同宮の「久志塚」で供養する(読売・京都 9/27)。

・印鑑供養 (5件)

新潟県内の専門業者でつくる県印章業組合連合会は「印章の日」の10月1日⁰⁶、長年使われたはんこに〈感謝をささげる〉「印章供養」をはじめて行った。「使えなくなったはんこはどうしたらよいか」「愛着があるので捨てるのは忍びない」などと、使用後の処分に関する問い合わせが増えたことをうけたもの(新潟日報・新潟 10/2ほか)。

印章製造卸業の「ウエダ」も10月1日、山梨県甲府市の塩沢寺で「印章供養会」を開いた。今年で35回目、社員ら11名が参加した。全国から集まった印鑑6,357本、表札233枚が境内の「印章塚」に〈奉納〉された。同社社長は、「東日本大震災で印鑑が津波で流された人もいる。その分も供養できるように思いを込めて手を合わせた」と話した(山梨日日・甲府 10/2)。

・眼鏡供養 (5件)

10月1日⁰⁷、目の神様をまつる徳島県鳴門市の葛城神社で、使われなくなった眼鏡約1千個の供養があった。境内の「めがね塚」前で行われた供養には、県めがね商連合会会員ら約20人が参列した。寄せられた眼鏡のうち使えるものはタイの農山村などに送る予定だが、2010年分は東日本大震災の被災地に送られた(徳島・徳島 10/4)。

10月3日、大分県大分市のヤノメガネ社は、万寿寺(臨済宗)で眼鏡供養を行なった。創業の1979年から行っている。供養後のまだ使える眼鏡は、バングラデシュに送る予定(大分合同・大分 10/4)。

・履物供養 (3件)

革靴の生産全国一の東京浅草・隅田川沿いの皮革メーカーは11月26・27日、台東区の玉姫稲荷神社で、「靴のめぐみ祭り市」の開催にあわせて、〈寿命の尽きた〉愛用の古靴を供養した(「古靴供養感謝祭典」)。「靴みこし」も練り歩いた(産経・東京 11/21、東京・東京 11/25ほか)。

名古屋のバレエ団が12月2日、名古屋市の高牟神社で行っているバレエ靴供養の記事もあった(朝日・名古屋 12/28)⁰⁸。

・遺品供養（2件）

遺品整理の専門会社「キーパーズ」の取り組みが紹介された。元々運送会社を営んでいた吉田社長が2002年に立ち上げた。人々の移動・核家族化、故人の高齢化に伴う遺族の高齢化によって遺品の整理ができない、孤独死・自殺者の増加（大家により依頼されることもある）などの社会的背景がある。吉田社長は、「死んだ段階では、故人の存在はまだ残っている。遺品の整理は、最終的にそれを消し去る大切な仕事」と話す。依頼者の希望があれば、一部を供養品として取り扱い、2ヶ月に1度、僧侶を呼んで供養する。同社は現在全国に6支店を展開、年間約1,500件の依頼を受けている（日刊ゲンダイ・東京 9/21、毎日・東京 11/8）。

以上駆け足で見えてきたが、多様なモノ供養の実態が垣間みられた。新聞で報道された供養物は、①宗教関連物（礼拝物、縁起物など）、②人形・ぬいぐるみ、③仕事道具（農業機械、針、扇、茶筌、櫛、版下など）、④日用・身の回り品（筆、箸、入れ歯、印鑑、眼鏡、履物など）、⑤思い出の品（写真、遺品など）⁹などがあつた。職人・商売人にとっては、彼らの生活（＝生命）を支えているモノであり、消費・使用者にとっては、長年使用したり、思い（念）の詰まったモノが供養の対象となっている。

行事としては、どんど焼き、針供養、筆供養のように習俗化した伝統行事もあるが、多くは比較的最近になってはじめられたものであつた。初めて開催されたものもあり、モノ供養が現代的事象であることがわかる。一方では程なく消滅するものもあるだろう。

伝統的行事の中にも変化が見られた。住環境の変化を背景に、どんど焼きがより広域のイベントとして再編されていたり、人形供養や仏壇供養の背景に、マンション暮らしなどの住宅事情の変化があつたりした。また、生活様式の変化によって、筆供養から鉛筆供養への変化（拡大）、農耕牛馬供養から農業機械供養へ変化していた。いずれの変化の仕方も無軌道なものではなく、既存の宗教伝統をいわば「資源」として、それを現代的に再解釈・再編していく様子がみられた。

主催は寺社よりも業界団体などによるものが多かつたが、そこでは供養行事は会社や組合の親睦も兼ねているようだ。一方で供養の主体（依頼者）は、消費・使用者でもあり、それを製造元や販売店が代行している面もあつた。

日程は、とくに集中しているのは年末年始だが、それぞれのモノにちなむ日も多かつた。開催場所は、筆供養は学問の神様、眼鏡供養は目の神様、扇供養は芸の神様などそれぞれのモノに所縁がある寺社で行われているものがあつた。

入れ歯供養や眼鏡供養のように、モノ供養を経ることで、リサイクル資源として再活用したり、人形供養を葬祭場が営利活動として行う（寺社や宗教者がモノ供養祭に協力するのも寺社経営と関わっている）など、経済合理的な思惑があることも明らか

になった。

3. 大学生意識調査

次に、大学生に対して行なったモノ供養意識調査の結果を少し紹介する。本調査では、モノの種類ごとに（12種）、供養・お祓い等をすべきかどうか、5段階でたずねた。さらに、「必ずやるべき」「やったほうがよい」と答えたものについては、その理由も5つの選択肢でたずねた。調査対象者は、2011年度東洋大学社会学部開講の専門科目であり他学部にも開かれている「宗教社会学」（担当・西山茂）の受講生と、西山ゼミ（昼間1部・夜間2部）のゼミ生であり、調査方法は集合調査（無記名式）である（表1）²⁰。

表1 調査実施・回収状況

	宗教社会学 2011/4/27 担当) 西山	1部西山ゼミ 2011/4/27 担当) 西山	2部西山ゼミ 2011/4/27 担当) 西山	計
配布数	208	2	2	212
回収数 (%)	205 (98.6)	2 (100.0)	2 (100.0)	209 (98.6)
有効票数 (%)	204 (98.1)	2 (100.0)	2 (100.0)	208 (98.1)

*回答内容が不完全な1票を無効票とした

*有効票率は、配布数中に占める有効票の比率

記事数の最も多かった「どんど焼き」に関連するもので、正月飾りや、破魔矢・熊手・だるま・招き猫などの縁起物を処分するとき、お寺や神社で拜んでもらったり、お焚き上げしてもらうことについては、表2-1のような結果を得た。

表2-1 縁起物供養

	度数 (%)
必ずやるべき	30 (14.4)
やったほうがよい	124 (59.6)
どちらともいえない	46 (22.1)
やらないほうがよい	6 (2.9)
絶対にやらないほうがよい	2 (1.0)
合計	208 (100.0)

縁起物の供養に関しては、「必ずやるべき」（14.4%）と「やったほうがよい」（59.6%）をあわせて74.0%だった。その理由については表2-2の結果となった。

表2-2 縁起物供養の理由

	度数 (%)
神仏や霊が宿っているので	54 (35.1)
人の念(思い)が入っているので	28 (18.2)
ゴミ扱いきれないので	36 (23.4)
習慣なので	34 (22.1)
その他	2 (1.3)
合計	154 (100.0)

理由としては、「神仏や霊が宿っているので」が35.1%と最も多かった。習俗化している行事とはいえ、「そのようにするのが習慣なので」は22.1%だった。首都圏に居住する学生という属性の影響もあるかもしれない。お焚き上げが自由に出来なかったり、主体的に処分する機会がないだろうからである。

次に歴史や広がりでも最もポピュラーなモノ供養と言える雛人形・五月人形などの古くからの飾り人形を処分するとき、人形供養やそれに類する儀礼をしてもらうことについて見てみよう(表3-1)。

表3-1 人形供養

	度数 (%)
必ずやるべき	52 (25.0)
やったほうがよい	126 (60.6)
どちらともいえない	26 (12.5)
やらないほうがよい	4 (1.9)
絶対にやらないほうがよい	0 (0.0)
合計	208 (100.0)

飾り人形の供養に関しては、「必ずやるべき」25.0%、「やったほうがよい」60.6%となった。本稿では紹介しないが、仏壇・神棚などの宗教的礼拝物についてたずねた問いでも、「必ずやるべき」20.7%、「やったほうがよい」63.5%であり、人形供養はそれを上回っている。理由については、表3-2の結果となった。

表3-2 人形供養の理由

	度数 (%)
霊や念がタタルかも	102 (57.3)
お礼とお別れの気持ち	48 (27.0)
他のモノとは区別したい	8 (4.5)
習慣なので	20 (11.2)
その他	0 (0.0)
合計	178 (100.0)

理由は、「宿っている霊や念（思い）がタタルかもしれないので」が57.3%と圧倒的に多い。「お礼とお別れの気持ちを表したいので」（27.0%）がそれに次いでいる。

学生にとっては、飾り人形の処分より、身近なように思われるぬいぐるみの処分については次の結果を得た（表4-1）。

表4-1 ぬいぐるみ供養

	度数 (%)
必ずやるべき	9 (4.3)
やったほうがよい	80 (38.5)
どちらともいえない	102 (49.0)
やらないほうがよい	13 (6.3)
絶対にやらないほうがよい	4 (1.9)
合計	208 (100.0)

ぬいぐるみに関しては、「やったほうがよい」（38.5%）と「どちらともいえない」（49.0%）に分かれた。同じ人形であっても飾り人形との違いがはっきりしている。

表4-2 ぬいぐるみ供養の理由

	度数 (%)
霊や念がタタルかも	29 (32.6)
お礼とお別れの気持ち	52 (58.4)
他のモノとは区別したい	4 (4.5)
習慣なので	4 (4.5)
その他	0 (0.0)
合計	89 (100.0)

理由としては、「お礼とお別れの気持ちを表したいので」（58.4%）が最も多く、「宿

っている霊や念（思い）がタタルかもしれないので」(32.6%) がそれに次いでいる（表4-2）。飾り人形の場合とは逆転している。飾り人形は、そのものに霊的なものが感じられていた。テレビ、雑誌等メディアでのいわゆるスピリチュアルの影響も考えられるかもしれない。

職人や商人たちが長年使い込んだ仕事道具（かんな・刃物など）を処分するとき、道具供養やそれに類する儀礼をしてもらうことについては次の通りである（表5-1、5-2）。

表5-1 道具供養

	度数 (%)
必ずやるべき	11 (5.3)
やったほうがよい	88 (42.3)
どちらともいえない	92 (44.2)
やらないほうがよい	13 (6.3)
絶対にやらないほうがよい	4 (1.9)
合計	208 (100.0)

仕事道具に関しては、「やったほうがよい」(42.3%)と「どちらともいえない」(44.2%)に分かれた。

表5-2 道具供養の理由

	度数 (%)
霊や念がタタルかも	5 (5.1)
お礼とお別れの気持ち	83 (83.8)
他のモノとは区別したい	10 (10.1)
習慣なので	1 (1.0)
その他	0 (0.0)
合計	99 (100.0)

理由としては、「お礼とお別れの気持ちを表したいので」(83.8%)が圧倒的に多かった。

長年使い込んだ身の回り品（眼鏡・杖・入れ歯など）を処分するとき、供養やそれに類する儀礼をしてもらうことについては次のような結果を得た（表6-1）。

表6-1 身の回り品供養

	度数 (%)
必ずやるべき	2 (1.0)
やったほうがよい	22 (10.6)
どちらともいえない	141 (67.8)
やらないほうがよい	37 (17.8)
絶対にやらないほうがよい	6 (2.9)
合計	208 (100.0)

身の回り品に関しては、「どちらともいえない」(67.8%)が圧倒的に多い。「やらないほうがよい」も17.8%いた。本稿では紹介しないが、日用品供養(針・筆・茶碗・箸など)も同じ傾向だった(それぞれ69.7%、21.2%)。

表6-2 身の回り品供養の理由

	度数 (%)
霊や念がタタルかも	0 (0.0)
お礼とお別れの気持ち	18 (75.0)
他のモノとは区別したい	4 (16.7)
習慣なので	2 (8.3)
その他	0 (0.0)
合計	24 (100.0)

理由としては、「お礼とお別れの気持ちを表したい」(75.0%)が圧倒的に多い(表6-2)。日用品供養の理由(省略)も同じ傾向(66.7%)だった。

最後にモノ供養の一般的な理由とその評価については、次のような回答を得た(表7-1、7-2)。

表7-1 モノ供養の理由

	度数 (%)
霊や念が宿っている	99 (47.6)
感謝・離別	72 (34.6)
「もったいない」精神	12 (5.8)
習慣・美徳	22 (10.6)
その他	1 (0.5)
無回答	2 (1.0)
合計	208 (100.0)

表7-2 モノ供養の評価

	度数 (%)
大いに評価する	64 (30.8)
ある程度、評価する	116 (55.8)
どちらともいえない	21 (10.1)
あまり評価しない	6 (2.9)
まったく評価しない	0 (0.0)
無回答	1 (0.5)
合計	208 (100.0)

モノ供養の理由については、霊や念が宿っている (47.6%)、感謝・離別 (34.6%) の2つに分かれた。また、モノ供養の評価については、評価するものが86.6%に達した。

以上、大学生の意識調査からは、縁起物、人形供養など、モノ供養をした方が良いという回答が多く (それぞれ74.0%、85.6%)、多くの学生がモノ供養を肯定的に評価していることがわかった。現在でもモノ供養が続いている一端と考えられよう。一方で、人形供養とぬいぐるみ供養の違いなど、その理由については、モノの種類ごとの特徴があった。大別すれば、①霊など聖なるものへの畏れ、②使用者の思い (念) のタタリの恐れ、③感謝・お別れ、④習慣などが挙げられよう。理由の多彩さは、モノの多様な属性を反映しているとともに、モノ供養の伝統性 (アニミズム) や現代性 (消費社会、スピリチュアリティ) を反映しているものと考えられる。また、道具供養、身の回り品供養において、それほど高い意識が出なかったのは、大学生を対象とした調査自体の限界とともに、両者の供養においては、業者の主導性を傍証しているとみることも出来よう。

おわりに

新聞報道と、大学生意識調査の結果から、現代日本のモノ供養を概観するという本稿の目的は既に終えた。今後に残された課題は多いが、ひとまず筆をおきたい。

ところで、2011年3月11日の東日本大震災は、一面ではモノの喪失体験でもあった²⁰。被災者たちは位牌や思い出の品 (写真など) を探し求め、行政やボランティアはそれらを保管し被災者に届けようとした。写真業者などが写真を修復したりする取り組みもみられた。ここからもモノが単なる物理的「物」にとどまらないことが再認識される。モノが単なる「物」でないというのも、そこに人間が介在するからであり、モノを通して人間や宗教を逆照射する試みは一定の意義があろう。本稿は極めて不十分な

段階にとどまっているが、筆者は今後もその取り組みを進めていきたい。

【付記】本稿の執筆に当たっては、東洋大学名誉教授の西山茂氏に査読を受け、適切な指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

註

- (1) 2009年に発売されたやましたひでこ著『断捨離』（マガジンハウス）は発行部数27万部を超え、2010年の流行語大賞にノミネートされた。関連本も数多く出版されている。株式会社マガジンハウスホームページ <http://magazineworld.jp/books/all/?gosu=8647>（最終閲覧日2012/2/20）。また2010年12月に発売された近藤麻理恵『人生がときめく片づけの魔法』（サンマーク出版）は、発売から10ヶ月足らずで発行部数100万部を突破したという（スポーツニッポン 2011/9/28）。過去にも片づけブームのようなものはあった。しかし、例えば野口悠紀雄『「超」整理法』（中央公論社、1993年）などがあくまで「整理」を主眼にしていたのに対して、『断捨離』などはモノを捨てることを中心としている。さらに片づけが単なる整理術にとどまらず、そこに何らかの精神性を見出しているところも興味深い。「断捨離」とはヨガの行法哲学「断行・捨行・離行」から名付けられたという（『断捨離』8頁）。『人生がときめく片づけの魔法』にも随所に精神性への言及が見られるが、例えば「片づけはマインドが9割」（6頁）などがある。
- (2) 以下、新聞の出典は（）内に、紙名の略称（ex. 中外日報→中外）、地方版（本社は略す）、朝夕刊（夕刊の場合、夕と記す）、日付で示す。
- (3) 一方で限られた資源・スペースを有効活用する必要があり、現在の所有者にとって価値を喪失したものは、所有者から手放され、「加工」されて新たな需要者に引き渡される。例えば自殺者や孤独死があった場合、遺品整理を行う業者があり、訳あり物件の「ロンダリング」（一定期間、格安の料金で貸し出すこと）が行われる。これらをテーマとする映画（『アントキノイノチ』）や小説（原田ひ香『東京ロンダリング』集英社、2011年）も登場し話題になった。
- (4) 霊的次元への働きかけによって除災招福を願うという意味では、「お祓い」という神道的用語もある。「供養」と「お祓い」は、厳密にはそれぞれの宗教的伝統を踏まえた概念であり、現象的にはモノの「お祓い」はモノの使いはじめから処分に行われるまで行なわれるのに対して、モノの「供養」は処分する際に行われる。しかし本稿では、モノの「お祓い」もモノに対する宗教的儀礼という意味で、「モノ供養」と機能的に等価なものとみなして除外しない。
- (5) モノ供養祭の実際の名称は、「〇〇供養」の他、「〇〇感謝祭」「お祓い」「お焚き

- 上げ」等、様々であり、ワード検索では漏れてしまう可能性が高い。
- (6) 類似の事例として、農業機械化にともない、従来の馬の絵馬に加えてトラクター絵馬などを導入して好評を博したという埼玉県東松山市の妙安寺（曹洞宗）の事例、交通手段の変化にともない馬供養から車のお祓いも行うようになった静岡県小山町の円通寺（曹洞宗）の事例がある [松崎2004：191-193]。
 - (7) どんど焼きの記事では、宮崎県えびの市でおこった死亡事故についての報道が3件あった（宮崎日日 1/8ほか）。
 - (8) 「」は固有名詞の他、参照記事中の会話文を、〈〉は参照記事中の地の文からの引用を示す。
 - (9) [岡田2007：106-107] も参照。ちなみに、妙興寺はモノ供養の研究を行っている岡田真美子の自坊。寶多は、愛知県保険医協会が主催して、名古屋市の日泰寺で行われている入れ歯供養を紹介している [寶多 2003：96]。なお妙興寺も、名古屋の事例も、供養祭は10月8日（「イレバの日」）に行われる。また、福岡県久留米市の歯科技工士は、故人の金歯や銀歯をアクセサリーに加工して遺族に提供するサービスを行っているという（読売・福岡 2/22）。ただし、これはモノ供養というよりは手元供養（人の供養）の一種と考えられる。モノが人と物の境界にあるという両義性を示している。
 - (10) 中外陶園ホームページ <http://www.chugaitoen.co.jp/campny/approach.html>（最終閲覧日2012/2/20）を参照。
 - (11) 干支供養は、他の焼き物産地でも行われている。愛知県常滑市のある業者は「産地で毎年代表して供養しているので、安心して処分して下さい」としている。有限会社丸よ小泉商店ホームページ <http://www.gld.mmtr.or.jp/~raihodo/miugaku.htm>（最終閲覧日2012/2/20）。
 - (12) 薩摩藩主・島津斉彬（1809～1858）が日本初の写真撮影を行ったとされていた日（1841年6月1日）にちなんで、日本写真協会が制定（産経・奈良 5/24）。
 - (13) 扇供養については、[寶多2003：96-97] において、名古屋市の大須観音（真言宗）の事例が報告されている。
 - (14) 類似の事例として、和歌山県みなべ町の「梅供養」がある。当地の梅栽培の先駆者をしのぶもので、こちらは奉納に近い（紀伊民報 2/13）。
 - (15) 寶多は、名古屋市朝日神社の「箸感謝祭」を紹介している [寶多2003：94-95]。
 - (16) 1873年、公式書類などに実印を押すことが定められた日（新潟日報・新潟 10/2）。
 - (17) 10月1日は「眼鏡の日」。「10（月）01（日）」の「0」をレンズ、「1」をツルにそれぞれ見立てている。日本眼鏡関連団体協議会ホームページ <http://www.megane10-01.com/index.asp>（最終閲覧日2012/2/20）。
 - (18) 「靴のめぐみ祭り市」については [松崎2004：30-34] に詳しい。名古屋の事例は、

〔寶多2003：97-98〕においても報告されている。

- (19) ()内の分類はあくまで便宜的なもの。針のようにある人には仕事道具でも、ある人には日用・身の回り品であるもの、印鑑のようにも使用者にとっては日用・身の回り品でも、製造者や販売者にとっては、商売品であるようなものもある。
- (20) 本調査は、西山茂氏が調査設計を行い、筆者、朴賢柱氏らが協力して2009年と2011年に実施した。集計は筆者が中心となって行なった。今回紹介するのは2011年のものの一部である。調査対象者の主な属性は以下の通り。性別は、男性38.5% (80人)、女性61.1% (127人)、無回答1人。年齢は、平均20.3歳。居住形態は、親元74.5% (155人)、一人暮らし21.2% (44人)。出身地(主に育ったところ)は、東京都19.7% (41人)、千葉・埼玉・神奈川49.5% (103人)、茨城・栃木・群馬12.5% (26人)、北海道・東北6.7% (14人)、中部6.3% (13人)。家の職業は、勤務79.8% (166人)、自営16.3% (34人)。家の主観的な生活水準は、中の上26.4% (55人)、中の中57.2% (119人)、中の下10.6% (22人)。家の宗教は、既成仏教30.8% (64人)、神道(神社)5.3% (11人)、ない35.6% (74人)、わからない18.8% (39人)。自身の宗教は、ない61.1% (127人)、わからない17.8% (37人)、無回答15.9% (33人)。
- (21) 災害による非自発的喪失とモノ供養の自発的喪失を分けるという考え方もある〔池内2010〕。

参考文献

- 池内裕美「成人のアニミズム的思考—自発的喪失としてのモノ供養の心理」、『社会心理学研究』第25巻第3号、2010年、167～177頁。
- 岡田真美子「物や動物の供養が環境をよくします」、『寺門興隆』2007年2月号、2007年、102～108頁。
- 「エコロジカルでスピリチュアルな生命観」、国際宗教研究所編『現代宗教2010 特集エコロジーとスピリチュリティ』秋山書店、2010年、69～87頁。
- カフラマン・ジャーヒット『日本における道具・モノ供養』、筑波大学提出博士論文、2009年。
- 国学院大学日本文化研究所編『神道事典』弘文堂、1994年。
- 寶多國弘「モノの供養祭・感謝祭に関する調査研究」、『流通研究』第8号、愛知学院大学流通科学研究所、2002年、137～144頁。
- 「消費者の廃棄行動とモノ供養祭・感謝祭について」、『同志社商学』第54巻第5・6号、2003年、90～105頁。
- 隈元正樹『モノのお祓い・供養等に関する意識調査報告』2011年(未公開)。
- 「現代日本の大学生のモノ供養観」、『宗教研究』第371号、2012年、146～147頁。

佐野賢治「もの・モノ・物の世界―序にかえて」、印南敏秀ほか編『もの・モノ・物の世界―新たな日本文化論』雄山閣、2002年、1～7頁。

対馬路人・西山茂・島蘭進・白水寛子「新宗教における生命主義的救済観」、『思想』第665号、1979年、92～115頁。

ボードリヤール, J (今村仁司・塚原史訳)『象徴交換と死』筑摩書房、1992年。

————『消費社会の神話と構造〈普及版〉』、紀伊國屋書店、1995年。

松崎憲三『現代供養論考―ヒト・モノ・動植物の慰霊』慶友社、2004年。